

## 日本語とヒンディー語の関係節の対照研究 —関係節の種類と特徴, 関係節化の可能性について—

今村 泰也

### 1. はじめに<sup>1</sup>

日本語とヒンディー語<sup>2</sup>はともに後置詞を持つ SOV 言語で, 単文ではほぼ同じ語順をとる。しかし, 複文ではヒンディー語がインド・ヨーロッパ語の特徴を見せ, 語や節の順序および文構造において日本語とは異なる様相を呈する。本稿ではこうした点に着目し, 日本語とヒンディー語の関係節(連体修飾節)の対照研究を行う。

日本語の関係節は, 「日本を代表する企業」「私が英語を習った先生」「彼が会社を辞めた理由」のように一貫して修飾節が主名詞の前に置かれ, どのような種類の関係(いわゆる「内の関係」「外の関係」など)も同じ構造で表される。しかし, ヒンディー語には関係詞を用いた関係節をはじめ, 複数の関係節構造がある。それぞれにどのような特徴と制約があり, 使い分けられているのか, そして, 日本語の関係節とどのように対応するのか, というのが筆者の問題意識であり, 本研究の出発点である。

とはいえ, 関係節は主名詞と修飾節の統語的・意味的な関係のみならず, 修飾節におけるテンス・アスペクト・モダリティ等の問題にもつながる非常に大きなテーマである。したがって, 本稿では主として統語的な観点から日本語とヒンディー語の関係節を対照し, 考察を行う。なお, 本稿の考察対象は動詞が名詞を修飾するタイプの関係節に限定する。



内容に関わる)と述べ、関係節を統語的・意味的に2つの類型に分けた(pp. 197-8)。

(5) a. [女房が近所の者から聞いた]話 (< 女房が話を近所の者から聞いた)

b. [女房の幽霊が三年目になってあらわれる]話 (pp. 193, 199)

そして、「内容補足的」な修飾をさらに「ふつうの内容補充」(内容そのものをいわば正面から補充し、表す場合(次例(6)-(7))と「相対的補充」(主名詞が本来的に相対する概念の内容を表す、いわば「反面補充」とでも言うべき場合(下例(8)-(11))の2つに区別した。

(6) [清少納言と紫式部が会った] 事実

(7) [それが正しいという] 意見

(8) [先頭集団が走っている] 前 (を…)

(9) [上役とけんかした] 帰り

(10) [火事が広がった] 原因は空気が乾燥していたことだ<sup>9</sup>。

(11) [たばこを買った] おつり (pp. 199-201)

「相対的補充」を成り立たせる名詞は、空間的な前後左右(上例(8))、時間的な前後関係((9))、および因果関係を表す名詞((10)-(11))であることが知られ、これらに共通する意味的特性は「相対的關係」を表すことである。

以上の寺村の分類を整理すると次のようになる。

(12) 寺村(1992: 202)による関係節の類型

{	内の関係 = 付加的修飾	{	ふつうの内容補充
	外の関係 = 内容補足的修飾		相対的補充

Keenan & Comrie (1977) が扱った関係節(2.2節)は、概ね、寺村の言う「内の関係」に相当する。

### 3. 日本語の関係節

本節では日本語の関係節の特徴と関係節化の制約を概観する。以下の記述

は久野(1973)、柴谷[他](1982)、大島(2003)、加藤(2008)に依拠している。各先行研究で用いられている用語には若干の相違があるが、本稿では混乱を避けるため、原文の完全な引用を除いて用語法を統一する。

#### 3.1 関係節の特徴

日本語の関係節は一般に次のような特徴を持つ。

- ① 修飾節が主名詞に先行する(修飾節前置型)。
- ② 英語などに見られる関係詞(関係節標識)の類がない<sup>10</sup>。
- ③ 主名詞と修飾節の統語関係や意味関係が標示されない。
- ④ 修飾節内の動詞(〜ル/タ)は定形の場合と非定形の場合がある<sup>11</sup>。

以下、具体例を挙げ、もう少し詳しく見る。日本語の関係節は、修飾節内の主名詞の場所に空所が置かれ、関係を標示する格助詞なども消去される。このようなタイプの関係節は空所型(gap type)と呼ばれ、主名詞の前に修飾節を置く言語の特徴である(次例の空所位置をφで、消去された格助詞を下線で示す)。

- (13) a. [φこの小説を書いた] 作家 (< 作家がこの小説を書いた)  
 b. [彼がφ使っている] パソコン (< 彼はパソコンを使っている)  
 c. [私がφお金を貸した] 友達 (< 私は友達にお金を貸した)  
 d. [φこの本を買った] 古書店 (< 古書店でこの本を買った)<sup>12</sup>

しかし、修飾節に主名詞が代名詞(+格助詞)の形で残留することがある。

- (14) a. [太郎がそこに長年暮らしていた] アパート  
 b. [太郎がそれで一生懸命木を切った] のごぎり  
 c. ?[太郎がその人に秘密を打ち明けた] アメリカ人

(柴谷[他]1982: 371)

ただし、主名詞が修飾節内の主語ないし直接目的語として機能しているときには残留できない。

- (15) a. \*[その人]が町にやって来た] アメリカ人;  
 b. \*[太郎がその人]を探している] アメリカ人;

(柴谷[他]1982: 371)

上例(14)の代名詞は省略できる。以上を整理すると下表のようになり、関係節化の容易さという点で、名詞句階層 (2.2 節) との一致が見られる<sup>13</sup>。

表1 代名詞残留と関係節の成立 (柴谷[他] (1982: 371) を一部改変)

主名詞の 文法機能	修飾節内に	
	代名詞あり	代名詞なし
主語	—	+
直接目的語	—	+
間接目的語	?	+
斜格名詞句	+	+

(+は「可能」、—は「不可能」、?は「はっきりしない」の意味)

### 3.2 関係節化の制約

#### 3.2.1 「内の関係」の関係節化

2.2 節で, Keenan & Comrie (1977) が提案した名詞句階層と英語の関係節化の例を見た。日本語の場合, 主語から斜格名詞句まで関係節化できるが (上例(13))<sup>14</sup>, 属格名詞句の関係節化には制約があり (次例(16))<sup>15</sup>, 比較の対象は関係節化できない ((17))。

- (16) a. [父親が欠席した] 太郎 (< 太郎の父親が欠席した)  
 b. [父親が逮捕された] 太郎 (< 太郎の父親が逮捕された)  
 c. \*[先生が父親を呼び出した] 太郎 (< 先生は太郎の父親を呼び出した)  
 d. \*[先生が父親に電話した] 太郎 (< 先生は太郎の父親に電話した)

(風間[他] 2004: 162 を改変)

- (17) \*[太郎が速く走る] 父親 (< 太郎は父親より速く走る)

#### 3.2.2 「外の関係」の主名詞

2.3 節で見たように, 日本語では「内の関係」だけでなく, 「外の関係」も

成り立つ。しかし, 「外の関係」では主名詞になる名詞は限られている。寺村 (1992) は主名詞の種類 (意味的特性) によって「外の関係」を以下のように下位分類している。

- ① 発話・思考の名詞 …… 「言葉」「命令」「噂」「考え」「期待」など  
 (18) a. [「人生は地獄よりも地獄的である」という] 言葉  
 b. [心は薄氷の上を歩く] 思いだった。  
 ② 「コト」を表す名詞 …… 「事実」「運命」「習慣」「可能性」「方法」など  
 (19) a. [少納言と彼女 (柴式部) が逢った] 事実は, 未だ発見されない。  
 b. [ローマとカルタゴが戦った] 歴史  
 ③ 感覚の名詞 …… 「姿」「音」「匂い」「味」「絵」「光景」など  
 (20) a. [だれかが病室の扉をそっと開ける] 気配がする。  
 b. [肩を叩いたり握手をしたりする] シーンがあらこちで見られた。  
 ④ 「相対性」の名詞 …… 「上」「翌日」「帰り」「理由」「結果」など  
 (21) a. [私たちが勉強をしている] 上で誰かが柔道の練習をしていた。  
 b. おきんには [兄さんが帰って来てほしいと思う] 理由があった。  
 ①~③は「ふつうの内容補充」、④は「相対的補充」に当たる (2.3 節)。名詞の種類によって修飾節との間に「という」が介在するが, 「という」の介在可否, 可の場合それが必要か任意かは, 修飾節の陳述度も関わっており複雑である<sup>16</sup>。詳しくは寺村 (1992: 261-296) を参照されたい。

#### 3.2.3 修飾節内の統語的制約

##### ① 修飾節における動詞の形式

時制の分化 (〜ル/タの分化) を持つ要素は関係節を作ることができるが, 意志形 (〜う/よう), 命令形 (〜しろ) など時制の分化を持たない要素は関係節を作ることができない<sup>17</sup>。

- (22) a. [一流シェフが {作る/作った}] 料理  
 b. [パティシエが {作っている/作っていた}] デザート  
 c. \*[私が選ぼう] ワイン

d. \*[ソムリエが選べ] ワイン (大島 2003: 92 を改変)

## ② 修飾節における「は」の使用

修飾節では主題を表す「は」は使えず、「が」または「の」に置き換えられる。対比の「は」であれば使うことができる。

(23) a. [私 {\*/は/が/の} よく行く] レストラン

b. [私はよく行くが、家族はあまり行かない] レストラン

以上、本節では日本語の関係節の特徴と関係節化の制約を見た。日本語の関係節は主名詞と修飾節の多様な関係をすべて修飾節前置型で表す。空所型を典型とし(一部代名詞残留あり)、主名詞と修飾節の関係標示や関係詞もない。関係節化される名詞句および関係節化の制約において、Keenan & Comrie (1977) が提案した名詞句階層との一致が見られた。

## 4. ヒンディー語の関係節

次にヒンディー語の関係節を見る。ヒンディー語では関係節を形成する手段として、①分詞を用いる方法、②不定詞を用いる方法、③関係詞を用いる方法(関係詞節)、④補文を用いる方法(補文節)がある。しかし、関係節とえば普通は③のみを指し、①～④を関係節化の点から比較・考察している研究は少ない。本稿では上述の関係節の定義(2.1節)に従ってこれらに関係節と認め、各構造の特徴と関係節化の制約を記述する。

### 4.1 分詞を用いた関係節

未完了分詞/完了分詞が助動詞 *huaa*<sup>15</sup> を伴って名詞を修飾する。これは英語の現在分詞 (-ing)/過去分詞 (-ed) が名詞を修飾する構造に似ている。

#### 4.1.1 関係節の特徴

分詞を用いた関係節は次のような特徴を持つ。

① 修飾節が主名詞に先行する(修飾節前置型)。

② 関係詞(関係節標識)の類がない。

③ 主名詞と修飾節の統語関係や意味関係が標示されない(空所型)。

④ 修飾節内の動詞(分詞)は非定形で、主名詞の性・数・格に一致する。

次例(24)は未完了分詞、(25)は完了分詞を用いた関係節の例である。未完了分詞は進行中の動作/過程を表し、完了分詞は動作/過程の完了状態を表す(Kachru 1980: 35, Kachru & Pandharipande 1983: 4)。

(24) vah [cal-tii huii] gaaRii=se kuud=paR-aa.  
3SG 動<-IMPF.F.OBL AUX.F.OBL 列車.F.SG.OBL=ABL 飛び降りる-PFV.M.SG  
「彼は走っている列車から飛び降りた」 (Kachru 1980: 28)

(25) [ek bujh-e hue] alaav=ke=saamne...  
一 消える-PFV.M.SG.OBL AUX.M.SG.OBL 焚き火.M.SG.OBL=GEN=前に  
「消えてしまった焚き火の前に(父子が座っている)」 (Premchand, Kafan)

上例は修飾節内の動詞が自動詞であるが、他動詞の場合、主語は属格で示される(人称代名詞は属格形で、それ以外は属格後置詞を付けて表す)。

(26) yah [mere dost=kii likh-ii huii] pustak hai.  
これ 1SG.GEN 友人=GEN.F 書<-PFV.F AUX.F 本.F.SG COP.PRS.3SG  
「これは私の友人が書いた本です」 (田中・町田 1986: 120)

また、修飾節内では主語だけでなく、場所や時間を表す斜格名詞句も属格で示される。次例では主語に加えて、本来、場所格で示されていた名詞句(landan meM 「ロンドンで」)が修飾節内で属格に変わっている。

(27) [merii landan=kii (<meM) khariid-ii huii] kitaabeM  
1SG.GEN ロンドン=GEN.F(<LOC) 買う-PFV.F AUX.F 本.F.PL  
us=ke=paas haiM.  
3SG=GEN=そばに ある.PRS.3PL  
「私がロンドンで買った本は彼が持っている」  
(Kachru & Pandharipande 1983:6)

分詞を用いた関係節は、英語の伝統文法の定義からすれば節とは言えないが、英語の関係節と同じ機能を果たしている<sup>19</sup>。

## 4.1.2 関係節化の制約

分詞を用いた関係節にはいくつかの制約がある。

## ① 主語と直接目的語しか関係節化できない。

分詞を用いた関係節は主語と直接目的語は関係節化できる (上例(24)-(27)) が、間接目的語 (次例(28)) や斜格名詞句 ((29)) は関係節化できない。

(28) \*[merii ciTThii bhej-ii huii] laRkii  
1SG.GEN 手紙.F.SG 送る-PFV.F AUX.F 女の子.F.SG

「私が手紙を送った女の子」 (< 私は女の子に手紙を送った)

(29) a. \*[merii ciTThii bhej-e hue] Daak ghar  
1SG.GEN 手紙.F.SG 送る-PFV.M.OBL AUX.M.OBL 郵便局.M.SG.OBL

「私が手紙を送った郵便局」 (< 私は郵便局から手紙を送った)

b. \*[merii ciTThii likh-ii huii] qalam  
1SG.GEN 手紙.F.SG 書く-PFV.F.SG AUX.F ペン.F.SG

「私が手紙を書いたペン」 (< 私はペンで手紙を書いた)

ただし、時間を表す斜格名詞句 (samay 「～(る/た)時に」) は未完了分詞で関係節化できる。この場合、助動詞 huua は現れない (McGregor 1995: 174)。

(30) [barf gir-te] samay andar rah-o.  
雪.F 降る-IMP.F.M.OBL 時.M.OBL 中に いる-IMP

「雪が降っている時には中にいなさい」 (Hook 1979: 137)

(31) [hamaare baahar {nikal-te /\*nikl-e}] samay  
IPL.GEN.OBL 外へ 出る-IMP.F.M.OBL 出る-PFV.M.OBL 時.M.OBL  
aasmaan=meM baadar chaa rahe th-e.  
空.M=LOC 雲.M.PL 広がる PROG.M.PL AUX.PST-M.PL

「私たちが外へ出た時、空に雲が広がっていた」 (Hook 1979: 137)

Comrie (1989: 156) は斜格名詞句の関係節化について、「場所格 (locatives) や時間表現 (temporals) は、必ずしもこの階層 [筆者注: 名詞句接近可能性階層] に適合せず、ある言語では関係節化が非常に容易であり、別の言語では関係節化が非常に難しい」と述べている。分詞を用いた時間表現の関係節化

は samay に限られており、全体として斜格名詞句は関係節化できない。

## ② 修飾節を否定できない

日本語の関係節では、修飾節の動詞を否定できるが (例: 「結婚していない人」「試験を受けなかった学生」)、ヒンディー語の分詞を用いた関係節では否定できない (Jain 2000: 52)。

## 4.2 不定詞を用いた関係節

次に、不定詞を用いた関係節を見る。ヒンディー語の不定詞は名詞を直接修飾することができず、属格後置詞 kaa あるいは文法的要素 vaalaa<sup>20</sup> を伴う必要がある (以下、<不定詞+kaa>、<不定詞+vaalaa> と呼ぶ)。

## 4.2.1 関係節の特徴

不定詞を用いた関係節は次のような特徴を持つ。

- ① 修飾節が主名詞に先行する (修飾節前置型)。
- ② 関係詞 (関係節標識) の類がない。
- ③ 主名詞と修飾節の統語関係や意味関係が標示されない (空所型)。
- ④ 修飾節内の動詞 (不定詞) は非定形で、常に斜格形をとる。属格後置詞 kaa および文法的要素 vaalaa は主名詞の性・数・格に一致する。

## 4.2.2 &lt;不定詞+kaa&gt;

<不定詞+kaa> は「外の関係」(修飾節が主名詞を「内容補充的」に修飾する) に用いられる。以下、寺村 (1992) の分類 (3.2.2 節) に従い、「外の関係」の用例を挙げる。この構造では修飾節の動詞を否定できる (次例(32))。

## ① 発話・思考の名詞

(32) [dahez na le-ne=de-ne=kaa] caTTaanii sankalp  
持参金.M NEG やり取りする-INF.OBL=GEN.M.SG 堅い 決意.M.SG  
「持参金をやり取りしない堅い決意」 (HJD12854)

## ② 「コト」を表す名詞

- (33) [bacat kar-ne=kii] aadat Daal-o.  
貯金 する-INF.OBL=GEN.F 習慣.F.SG 身につける-IMP  
「貯金する習慣を身につけなさい」 (HJD00871)

## ③ 感覚の名詞

- (34) [machliyaaM tal-ne=kii] gandh  
魚.F.PL 揚げる-INF.OBL=GEN.F 匂い.F.SG  
「魚を揚げる匂い」 (HJD0319r)

## ④ 「相対性」の名詞

- (35) [aaraam=kar-ne=ke] baad cal-eMge.  
休息する-INF.OBL=GEN.M.OBL 後.M.OBL 出かける-FUT.I.M.PL  
「休息した後で出かけましょう」 (田中・町田 1986: 90)

- (36) [buxaar=ke phail-ne=kii] vajhoM=kii jaaMc  
熱.M=GEN.M.OBL 広がる-INF.OBL=GEN.F 理由.F.PL.OBL=GEN.F 調査.F.SG  
「デング熱が広がっている理由の調査」 (BBC061002)

<不定詞+kaa> は「相対性」の名詞のうち、「前/後」などの時間的な前後関係や「原因/結果」などの因果関係を表す名詞は関係節化できるが、「上/横」(例:「私が勉強している横で弟はテレビを見て笑っている」)などの空間的な関係を表す名詞は関係節化できない。

<不定詞+kaa> を用いた関係節には次のような例もある。

- (37) a. [pii-ne=kaa] paanii b. [khaa-ne=kii] mez  
飲む-INF.OBL=GEN.M.SG 水.M 食事する-INF.OBL=GEN.F テーブル.F.SG  
「飲み水」 「食卓」

- (38) [bacce=ko duudh pilaa-ne=ke] samay  
子供.M.SG.OBL=DAT 乳.M 飲ませる-INF.OBL=GEN.M.OBL 時間.M.OBL  
「子供に乳を飲ませる時間に」 (HJD13151)

- (39) [mohan=ke jaa-ne=kaa] samay ho-ne lag-aa.  
モーハン=GEN 行く-INF.OBL=GEN.M.SG 時間.M なる-INF.OBL 始める-PFV.M.SG  
「そろそろモーハンの行く時間だ」 (Agnihotri 2007: 230)

上例(37)は直接目的語 (< 水を飲む) や斜格名詞句 (< テーブルで食事する) の関係節化ではなく、「飲むための水」「食事をするためのテーブル」のように目的や用途を表している。また、(38),(39)は斜格名詞句の関係節化に見えるが、分詞を用いた関係節 (上例(30),(31)) と異なり、主名詞は特定の時間 (「～するべき時間」) を表している。つまり、修飾節は主名詞の内容を補っており、これらは「外の関係」ととらえられる。

## 4.2.3 &lt;不定詞+vaalaa&gt;

次に <不定詞+vaalaa> の例を見る。<不定詞+vaalaa> による名詞修飾はヒンディー語における最も簡略な関係節で、主に主語の関係節化 (「～する人/もの」) に使われる<sup>21</sup>。修飾節に否定辞を置くこともできる (下例(41))。

- (40) [das liiTar duudh de-ne-vaalii] bhaiMs  
10 リットル 乳.M 与える-INF.OBL-vaalaa.F 水牛.F.SG  
「10リットルの乳を出す水牛」 (HJD06671)

- (41) [pariśram na kar-ne-vaale] chaatr  
努力.M NEG する-INF.OBL-vaalaa.M.PL 生徒.M.PL  
「努力しない生徒」 (Gupt & Sharma: 190)

<不定詞+vaalaa> は直接目的語も関係節化できる。

- (42) unhoM=ne [bhaarat=se xariid-ne-vaalii] ciizoM=par  
3PL=ERG インド=ABL 買う-INF.OBL-vaalaa.F 物.F.PL.OBL=LOC  
apnaa Taiks lagaa-naa suruu=kiyaa.  
REFL.GEN.M 税金.M 課す-INF 始める.PFV.M.SG  
「東インド会社はインドから購入する物に税金を課し始めた」

(Prayaas 2002: 22)

<不定詞+vaalaa> は「外の関係」の名詞句も関係節化できるが、<不定詞+kaa> に比べると使用頻度は低い。

- (43) yah [haMs-ne-vaalii] baat nahiiM hai.  
これ 笑う-INF.OBL-vaalaa.F 話;こと.F.SG NEG COP.PRS.3SG

「これは笑い事ではない」 (Kachru & Pandharipande 1983: 7)

(44) [mantroccaaraN=sc paidaa=ho-ne-vaalaa] laypuurN vaataavaraN  
マントラの詠唱=ABL 生まれる-INF.OBL-vaalaa.M 韻律に満ちた 雰囲気.M

「マントラを唱えて生じる韻律に満ちた雰囲気」 (BAL008)

修飾節 <不定詞+vaalaa> は非定形であり、特定の時制は表さない。上例のように、たいてい主名詞の属性や習慣を表す (現在時制の文にパラフレーズできる) が、未来の事態 (予定) や過去の事態を表すこともできる。

(45) [aa-ne-vaale] cand saaloM=meM  
来る-INF.OBL-vaalaa.M.OBL いくつかの 年.M.PL.OBL=LOC  
「来たる数年間に (今後数年間に)」 (BBC041029)

(46) [bauddh=dharm=ko calaa-ne-vaale] gautam buddh  
仏教=ACC 始める;興す-INF.OBL-vaalaa.M.PL ゴータマ・ブッダ  
「仏教を興したゴータマ・ブッダ」 (HJD0401R)

#### 4.3 関係詞節

これはヒンディー語の関係節の代表的なものである。

##### 4.3.1 関係詞節の特徴

- ① 修飾節が主名詞の後ろに置かれる (修飾節後置型) か、または主名詞の前後に置かれる (修飾節周囲型=主要部内在型)。
- ② 関係詞 (関係節標識) を用いる。
- ③ 関係詞に呼応する相関詞 (遠称詞 vah または近称詞 yah) が主節に置かれる。
- ④ 主名詞と修飾節の統語関係や意味関係が関係詞によって標示される。
- ⑤ 修飾節内の動詞は定形をとる。

以下、Kachru (1980) の記述に基づき、関係詞節の用例を示す。

(47) vah kitaab jo [raam=ne xariid-ii] bahut mahang-ii th-ii.  
COR 本.F.SG REL ラーム=ERG 買う-PFV.F.SG とても 高い-F COP.PST-F.SG  
「ラームが買った本はとて高かった」 [直接目的語の関係節化]

上例は、'raam ne kitaab xariidii' 「ラームは本を買った」と 'kitaab bahut mahangii thii' 「本はとて高かった」という2文を関係詞でつないだもので、英語の関係節構文 (The book that Ram bought was very expensive) に似ている。

しかし、ヒンディー語は比較的語順が自由であるため、関係節構文にはさまざまなバリエーションが見られる。下はその一例である。

(48) vah kitaab bahut mahang-ii th-ii jo [raam=ne xariid-ii].

COR 本.F.SG とても 高い-F COP.PST-F.SG REL ラーム=ERG 買う-PFV.F.SG

(49) [raam=ne jo kitaab xariid-ii] vah bahut mahang-ii th-ii.

ラーム=ERG REL 本.F.SG 買う-PFV.F.SG COR とても 高い-F COP.PST-F.SG

上例(48)では、(47)の「関係詞+修飾節」が文末に移動している。また、(49)では主名詞 kitaab 「本」が修飾節の中に現れており、主要部内在型の関係節<sup>22</sup>になっている。主名詞は通常、左側の節に現れ、右側の節からは省略される。

関係詞節は以下のように、さまざまな文法関係の名詞句を関係節化できる。

(50) jo laRkaa [so rah-aa th-aa] vah sor=se  
REL 男の子.M.SG 眠る PROG-M.SG AUX.PST-M.SG COR 騒音.M=INST  
jaag gayaa.

目が覚める 行く.PFV.M.SG

「眠っていた男の子が騒音で目を覚ました」 [主語]

(51) [maiM=ne jis laRkii=ko gaanaa sikhaa-yaa] vah  
1SG=ERG REL.OBL 女の子.F.SG.OBL=DAT 歌.M.SG 教える-PFV.M.SG COR  
ab reDiyo=par gaa-tii hai.

今;現在 ラジオ=LOC 歌う-IMPF.F AUX.PRS.3SG

「私が歌を教えた女の子は今、ラジオで歌っている」 [間接目的語]

(52) [raam jis kamre=meM rah-taa hai] vah  
ラーム REL.OBL 部屋.M.SG.OBL=LOC 住む-IMPF.M.SG AUX.PRS.3SG COR  
xuub havaadaar hai.

十分に 風通しがいい COP.PRS.3SG

「ラームが住んでいる部屋は実に風通しがいい」 [斜格名詞句]



- (53) [jis vyakti=kaa paisaa corii=ho gayaa] vah  
REL.OBL 人.M.SG.OBL=GEN.M.SG お金.M.SG 盗まれる 行く.PFV.M.SG COR  
cintit hai.  
心配な COP.PRS.3SG

「お金を盗まれた人は思い悩んでいる」 [属格名詞句]

上例のように、関係詞節は主語から属格名詞句まで関係節化することができる。しかし、比較の対象を関係節化すると不自然な文になり(次例(54)), (55)の方がより自然である<sup>23</sup>。

- (54) [hasan jis laRke=se lamb-aa hai] vah  
ハサン REL.OBL 男の子.M.SG.OBL=より 背が高い-M.SG COP.PRS.3SG COR  
hasan=se Dar-taa hai.

ハサン=INST 怖がる-IMPF.M.SG AUX.PRS.3SG

「ハサン(の方)が背が高い少年はハサンを怖がっている」 [比較の対象]

- (55) jo laRkaa [hasan=se naaT-aa hai] vah  
REL 男の子.M.SG ハサン=より 背が低い-M.SG COP.PRS.3SG COR  
hasan=se Dar-taa hai.

ハサン=INST 怖がる-IMPF.M.SG AUX.PRS.3SG

「ハサンより背が低い男の子はハサンを怖がっている」 [主語]

以上見たように、関係詞節は修飾節前置型の関係節では関係節化できない階層の名詞句を関係節化できる。「外の関係」は次に見る補文節で表される。

#### 4.4 補文節

最後に補文節による名詞修飾の例を見る。

##### 4.4.1 補文節の特徴

- ① 修飾節(補文節)が主名詞の後ろに置かれる(修飾節後置型)。
- ② 接続詞(補文標識)を用いる。
- ③ 接続詞に呼応する相関詞(近称詞 yah)が主節に置かれることがある。

- ④ 修飾節は主名詞の内容を表す(「外の関係」)。

- ⑤ 修飾節内の動詞は定形をとる。

- (56) raajan=ko aaśaa hai ki [use naukrii mil  
ラージャン=DAT 期待.F.SG ある.PRS.3SG CONJ 3SG.DAT 仕事.F.SG 見つかる  
jaa-egii]

行く-FUT.3.F.SG

「ラージャンは仕事が見つかるだろうという期待を抱いている」

(Kachru 1980: 38)

- (57) us=kaa yah daavaa ki [muniis ghuus=le-taa hai]  
3SG=GEN COR 主張.M.SG CONJ ムニーシュ 収賄する-IMPF.M.SG AUX.PRS.3SG  
bilkul sahii hai.

全く 正しい COP.PRS.3SG

「ムニーシュが収賄しているという彼の主張は全く正しい」

(Kachru 1980: 28)

上例で補文節を導く接続詞 ki は英語の that に相当する。(56)では補文節が aaśaa 「期待」の内容を、(57)では daavaa 「主張」の内容を表している。補文節は上述の他の関係節と異なり、節内に空所はなく、完全な文になっている。

以上、本節ではヒンディー語の関係節の種類と特徴、関係節化の制約を見た。ヒンディー語の関係節は修飾節の位置により前置型と後置型に大別できるが、日本語と同じ前置型には関係節化の制約があり、主語と直接目的語しか関係節化できない。一方、後置型の関係詞節ではほとんど全ての階層の名詞句を関係節化できる。各構造の使い分けは概ね、次の通りである。

- (i) 分詞を用いた関係節：進行/完了の状態表現

(58) a. [cal-tii huii] gaaRii 「走っている列車」

b. [ek bujh-e hue] alaav 「消えてしまった焚き火」

- (ii) <不定詞+kaa>：簡略な内容補充、目的・用途

(59) a. [machliyaam tal-ne=kii] gandh 「魚を揚げる匂い」

b. [khaa-ne=kii] mez 「食卓」

(iii) <不定詞+vaalaa> : 属性や習慣, 予定など

(60) [dillii jaa-ne-vaalii] gaaRii 「デリーへ行く列車」

(iv) 関係詞節: 定形動詞によるほとんど全ての階層の名詞句の関係節化

(61) tiin chaatr...jinke [pitaā Daak Tar haiM] 「父親が医者である三人の生徒」

(v) 補文節: 定形動詞による内容補充。

(62) aaśaa...ki [use naukrii mil jaa-egii] 「仕事が見つかるだろうという期待」

## 5. まとめ

以上, 日本語とヒンディー語の関係節を分析した結果, 次のような特徴を取り出すことができた (日本語は厳密には空所型と代名詞残留型で違いがあるため区別した。また, ヒンディー語の関係節の名称は表中では略記した)。

表2 日本語とヒンディー語の関係節構造の特徴

関係節構造の特徴	修飾節位置	関係詞	関係標示	動詞の形式	節の否定
日本語					
空所型	前置型	なし	なし	定形/非定形	できる
代名詞残留型	前置型	なし	あり	定形/非定形	できる
ヒンディー語					
分詞節	前置型	なし	なし	非定形	できない
不定詞節(2種類)	前置型	なし	なし	非定形	できる
関係詞節	後置型/周囲型	あり	あり	定形	できる
補文節	後置型	接続詞	なし	定形	できる

本稿で見たように, 日本語には2種類, ヒンディー語には5種類 (不定詞節は2種類) の関係節構造が認められる。両言語の大きな違いは, 日本語がどのような関係も空所型で表しうるのに対し (代名詞残留型は随機的), ヒンディー語は格関係の有無 (「内の関係」「外の関係」) や主名詞の文法関係, テンス・アスペクト (状态的/習慣的/時制的) の違いによって異なる関係

節を用いることである。その使い分けの概略は本稿で明らかにしたが, 同じ内容を複数の関係節で表すこともでき, さらなる研究が必要である。

表3 日本語とヒンディー語の関係節化の可能性

格関係の有無	あり						なし
	SU	DO	IO	OBL	GEN	OCOMP	
日本語							
空所型	+	+	+	+	+/-	-	+
代名詞残留型	-	-	?	+	+/-	-	-
ヒンディー語							
分詞節	+	+	-	-	-	-	-
<不定詞+kaa>	-	-	-	-	-	-	+
<不定詞+vaalaa>	+	+	-	-	-	-	+
関係詞節	+	+	+	+	+	?	-
補文節	-	-	-	-	-	-	+

(+は「可能」, -は「不可能」, ?は「はっきりしない」の意味)

最後に, 久野 (1973) が日本語を性格づける最も重要な特徴として挙げた3つの特徴に照らして, 日本語とヒンディーの共通点と相違点について述べる。

- ① 日本語はSOV (主語・目的語・動詞) 語順の言語である。
- ② 日本語は後置詞的言語である。
- ③ 日本語は「左枝分れ」的言語である。すなわち, 日本語は, 修飾語を被修飾語の左に置く。  
(久野 1973: 3-9)

①, ②については日本語とヒンディー語は同じであるが, ③については違いが生じる。すなわち, 日本語では一貫して修飾部を被修飾部の左に置くのに対し, ヒンディー語では, 語・句のレベルでは修飾部を被修飾部の左に置くが, 節のレベルでは左に置く場合 (前置型の非定形節) と右に置く場合 (後置型の定形節) がある。この違いが, 日本語とヒンディー語が単文ではほぼ同じ語順・構造であるのに対し, 複文では大きく異なる要因になっている。

## 注

- <sup>1</sup> 本稿執筆の過程で2人の母語話者 (Paraj Vidyarthi & Puneeta Vidyarthi 夫妻。ともにデリー出身の30代) の協力を得た。ここに心からの謝意を表したい。もちろん、本稿における誤りはすべて筆者の責任である。
- <sup>2</sup> インド・ヨーロッパ語族のインド語派に属する言語で、インド中北部で話されている。名詞に男性/女性の区別がある。ヒンディー語には能格があり、述語動詞が他動詞完了分詞の場合にのみ能格構文をとる (分裂能格)。
- <sup>3</sup> finite verb; 人称や時制によって限定された動詞の語形。
- <sup>4</sup> 英語の prenominal に「名詞前方型」という訳語が当てられていることがあるが、正反対の意味 (主名詞+修飾節) に解されるおそれがあるため、本稿では「修飾節前置型」という用語を用いる。
- <sup>5</sup> 英語の略語が表すものは、それぞれ次の通りである。  
 SU: 'subject', DO: 'direct object', IO: 'indirect object', OBL: 'major oblique case NP', GEN: 'genitive' (or 'possessor') NP, OCOMP: 'object of comparison'
- <sup>6</sup> たとえば、タガログ語やマラガシ語では主語だけ、ウェールズ語では主語と直接目的語しか関係節化できない。
- <sup>7</sup> 「連体修飾のシンタクスと意味 (その1~その4)」の表題で1975-78年にかけて発表された論文を再録したもので、本稿では寺村 (1992) と呼ぶ。
- <sup>8</sup> 寺村 (1992: 209-10) は、「内の関係」は英語のいわゆる「関係節構文」よりも広い範囲にわたるものであり、次のような名詞修飾構文も「内の関係」に含まれると述べている。
- (i) the house standing on the hill (⇔ the house stands on the hill)  
 (ii) the thing for you to find out (⇔ you find out the thing)  
 (iii) the last man to come (⇔ the man came last)  
 (iv) the white house (⇔ the house is white)
- <sup>9</sup> 「原因」の内容を表しているのは修飾節「火事が広がった」ではなく、その後続く「空気が乾燥していたこと」である。
- <sup>10</sup> 関係詞の存在は関係節の特徴であるが、関係節が現れるための必要条件ではない (Whaley 1997: 261)。
- <sup>11</sup> 日本語の連体修飾節には時制を持つものと持たないものがある。時制がある節においてはル・タがそれぞれ非過去・過去を表すが、時制がない節においては

それぞれ進行と完了のアスペクトを表す (杉浦 2003: 17)。

- <sup>12</sup> この場合、もとの文を「古書店がこの本を買った」と解釈することもできる。このように、格助詞の消去によって主名詞の文法関係が曖昧になる場合がある。
- <sup>13</sup> 「関係節内の同一指示的名詞句の削除ということに関係節化の基準と見做すと、代名詞を自由に残す副詞的目的語 [筆者注: 斜格名詞句] は関係節化を被りにくいと言える。反対に、主語と直接目的語は代名詞を残せないのであるから、もっとも関係節化を被りやすいということになる」(柴谷[他]1982: 371)
- <sup>14</sup> 斜格名詞句の場合、伴っている助詞による制約もいろいろあるが、煩雑になるので本稿ではこれ以上立ち入らない。詳しくは大島 (2003) を参照されたい。
- <sup>15</sup> 属格名詞句が主語以外の名詞句を修飾している場合には、一般的に許容されないようである (風間[他]2004: 162)。なお、属格名詞句の場合にも代名詞残留がある。
- (i) [私が{その人/彼/そ}の名前を忘れてしまった] お客 (久野 1973: 150)
- <sup>16</sup> 「発話→思考→コト→感覚、相対関係という順で、修飾節の陳述の度は減っていく、単なる叙述内容、proposition になっていくことが見られる。また、同じ名詞でも、その帰属性に由来する修飾の仕方の場合、そうでない場合より陳述度は低い。以上のことは、「トイウ」の介入の可能性と表裏をなしている」(寺村 1992: 296)
- <sup>17</sup> ただし、「～う/よう」と「～だろう」は翻訳調で若干不自然ながら関係節を作ることができる (発話時における話し手の推量ではなく、一般的な予測を述べる文)。
- (i) a. これは [多くの人に愛されよう] 名作だ。  
 b. [後世に長く残るであろう] 名著 (大島 2003: 93)
- <sup>18</sup> 英語の be 動詞に相当する honaa の完了分詞。後続名詞の性・数・格に一致する。huua はしばしば省略されるが、未完了分詞とともに使われた場合「進行中」を、完了分詞とともに使われた場合「完了」を強調する (Snell & Weightman 2003: 231)。
- <sup>19</sup> トルコ語の場合も修飾節の動詞は非定形をとり、主語は属格に置かれる。Comrie (1989: 143) は、言語間での関係節の比較には機能的な定義が必要であり、定形から成るか非定形から成るかというような違いは、一つの類型論的パラメーターとして利用すると述べている。
- <sup>20</sup> -vaalaa はきわめて生産性が高く、ヒンディー語において幅広く使われる多義

的な文法的要素である (先行研究では接辞とされている)。さまざまな品詞の語に付いて、特徴や属性を指定する形容詞句、名詞句を作る。

- <sup>21</sup> “Note that use of -vālā is often the simplest and concisest way of expressing what would be adjective phrases, or relative clauses involving expressions such as ‘the one who’, etc. in English.” (McGregor 1995: 170)
- <sup>22</sup> 「主要部内在型の関係節の最もわかりやすい例としては、関係節内部に、主名詞が、節内におけるその名詞の文法関係を表す通常形で現れていて、主節の方には主名詞を顕在的に表すものが何もないという場合である」(Comrie 1989: 145)
- <sup>23</sup> 本稿の考察対象は動詞が名詞を修飾するタイプの関係節であるが、比較の対象については例が見つけられなかったため、ここでは形容詞が名詞を修飾する例 (Kachru 1980: 31) を挙げている。

#### 略号一覧

1,2,3=人称; ABL=奪格; ACC=対格; AUX=助動詞; CONJ=接続詞; COP=コピュラ動詞; COR=相関詞; DAT=与格; ERG=能格; F=女性; FUT=未来; GEN=属格; IMP=命令; IMPF=未完了; INF=不定詞; INST=具格; LOC=所格; M=男性; NEG=否定; OBL=斜格; PFV=完了; PL=複数; PROG=進行相; PRS=現在; PST=過去; REFL=再帰代名詞; REL=関係詞; SBJV=仮定法; SG=単数  
(グロスのハイフン (-) は形態素境界, 等号 (=) は接語境界ないし複合語の境界を表す)

#### 用例出典

BAL: Sahni, Bhishm (1985) *Mere bhai Balraj*. New Delhi: National Book Trust.  
 BBC: BBC Hindi (<http://www.bbc.co.uk/hindi/>)  
 HJD: 古賀勝郎・高橋明 (編) (2006) 『ヒンディー語=日本語辞典』大修館書店。  
 Prayaas: University of Illinois at Urbana-Champaign  
 (<http://www.linguistics.uiuc.edu/hindi/>)

Premchand: Munshi Premchand's Stories (<http://munshi-premchand.blogspot.com/>)

#### 参考文献

- Agnihotri, Rama Kant (2007) *Hindi: An Essential Grammar*. London: Routledge.
- Comrie, Bernard (1989) *Language Universals and Linguistic Typology*. Second edition. Chicago: The University of Chicago Press. (松本克己・山本秀樹 (訳) (1992) 『言語普遍性と言語類型論: 統語論と形態論』ひつじ書房.)
- Gupt, Tansukhram and Omprakash Sharma (2000) *Saral Hindi Vyakaran*. New Delhi: Surya Bharti Prakashan.
- Hook, Peter Edwin (1979) *Hindi Structures: Intermediate Level*. Ann Arbor: The University of Michigan.
- Jain, Sushama (2000) *Structures of Japanese and Hindi*. New Delhi: Har-Anand Publications.
- Kachru, Yamuna (1980) *Aspects of Hindi Grammar*. New Delhi: Manohar Publications.
- Kachru, Yamuna and Rajeshwari Pandharipande (1983) *Intermediate Hindi*. Delhi: Motilal Banarsidass Publishers.
- 加藤重広 (2008) 「日本語関係節主要部の統語と意味」『日本言語学会第136回大会予稿集』4-9.
- 風間喜代三・上野善道・松村一登・町田健 (2004) 『言語学』第2版. 東京大学出版会.
- Keenan, Edward L. and Bernard Comrie (1977) Noun phrase accessibility and universal grammar. *Linguistic Inquiry* 8: 63-99.
- Keenan, Edward L. and Sarah Hawkins (1986) The Psychological Validity of the Accessibility Hierarchy. In: Edward L. Keenan (1987) *Universal Grammar: 15 Essays*, 60-85. London: Croom Helm.
- 久野 暉 (1973) 『日本文法研究』大修館書店.
- 呉人 恵 (2008) 「関係節の類型論: フィールドから見えてくる言語の多様

- 性 Part3」『日本語学会第 136 回大会予稿集』2-3.
- McGregor, R. S. (1995) *Outline of Hindi Grammar*. Third edition. Delhi: Oxford University Press.
- 西岡美樹 (2005) 「ヒンディー語のいわゆる名詞句について ― 属格後置詞 ‘kā’ を中心に ―」『京都産業大学論集』33: 74-98.
- 大島資生 (2003) 「連体修飾の構造」北原保雄 (編) 『文法 I』, 朝倉日本語講座 5, 90-108. 朝倉書店.
- 柴谷方良・影山太郎・田守育啓 (1982) 『言語の構造: 理論と分析』意味・統語篇. くろしお出版.
- Snell, Rupert and Simon Weightman (2003) *Teach Yourself Hindi*. Sevenoaks: Hodder & Stoughton.
- 杉浦滋子 (2003) 「日本語の連体修飾節における時制保有型と時制欠如型」『言語と文明』1: 7-19. 麗澤大学大学院言語教育研究科.
- 田中敏雄・町田和彦 (1986) 『エクスプレス ヒンディー語』白水社.
- 寺村秀夫 (1992) 『寺村秀夫論文集 I』日本語文法編. くろしお出版.
- Whaley, Lindsay J. (1997) *Introduction to Typology: The Unity and Diversity of Language*. California: Sage Publications.